

研究ノート

「新台湾人」の議論と政治意識をめぐって

川原絵梨奈

はじめに

台湾の社会を研究する場合、エスニシティーの問題は、今後も領域を問わず避けられない課題と言えるだろう。これまでも、台湾研究では歴史学の領域において、日本による植民地統治や国民党・国民政府の権威主義体制における国民統合政策への反発に起因したエスニシティーの意識化と政治化、それに関連した民主化運動に着目した研究が積極的におこなわれてきた¹。

これらの研究は、エスニシティーの政治化を経て、台湾意識の形成とその高まりが「本土化」を意識させ、新たな台湾ナショナリズムの台頭をとげる、といった議論に発展する。そして、これらの議論は、現在の中国と台湾との関係のあり方についての問題、さらには東アジアにおける台湾の国際的な位置づけと、ナショナリズムをめぐる諸問題に議論がシフトする傾向がある。つまり、国民国家という枠組みで台湾を捉えることに重点が置かれているのである。

だが、往々にして国民国家の枠組みの議論では、独立を求めるか否かといった「国民」としての政治的な選択を自ら拒否するような人々の意識については、一面的に解釈したり、見落とししたりしがちではなからうか。そこで拙稿では、「新台湾人」をめぐる諸言説を再検討し、「新台湾人」をめぐる言説に対する筆者なりの観点を示し、台湾におけるアイデンティティ問題についての今後の研究方法について展望する。

1. 「新台湾人」をめぐる言説とその特徴

「新台湾人」という言葉が頻繁に聞かれるようになったのは、1998年の台北市長選挙以降のことで、当時の総統であった李登輝が、選挙に先立ち国民党候補の馬英九に「新台湾人」を提唱するようアドバイスしたことからはじ

まったといわれる。もともとは対立候補の民進党陳水扁が台湾独立を唱えて「台湾優先」を主張したことに対抗したのである。

李登輝は「新台湾人」の目的は、「台湾アイデンティティを確立することであり、台湾人が自分たちの政権をうち立て、台湾人のための政治を行って、台湾人が繁栄する社会を作ることである」と述べ、先住民、本省人、外省人など、台湾にいつ来たかを問わず全てが台湾人であると主張した²。李登輝の提唱する「新台湾人」の議論とは、彼が著書の中で台湾の民主化は「台湾アイデンティティ」あるいは「台湾本土化」を意味するものでなければならなかった、と述べるように、彼が属していた国民党の一元独裁の否定と結びついたと言える³。

李登輝の主張に関連し、ステファン・コルクユフが「台湾アイデンティティの確立」を、国家アイデンティティの変遷のなかで論じている。コルクユフは外省人に対し広くアンケート調査を行い、その調査結果に基づき、「外省人の台湾化」はもはや避けられない事実であると述べている⁴。台湾の学者が外省人の国家アイデンティティの問題を論じる時、本人の出自と政治的立場が問われることは避けられない。しかしながら、コルクユフは外国人であることで、省籍問題について、第三者の立場から議論することが可能であると一般的に認識されており、彼も著書のなかで外国人であることの利点を強調している。また 1987 年以降、学問の自由化が進み、台湾におけるエスニシティに関する議論も積極的に行われるようになったが、依然として外省人のアイデンティティをテーマに扱った研究はそれほど多くはない。こうした学界の現状を踏まえたとき、コルクユフの研究は政治学に留まらず、多様な領域における外省人研究を補う議論であり、一定の評価を得ている。

だが、2004 年の台湾総統選挙の直前に出版され、その立場が台湾独立を支持する民進党議員の賛同を得ており、さらにコルクユフ自身が 2004 年の総統選挙の前に民進党の選挙活動に積極的に参加していることなどからも、彼が独立を支持していることが指摘できよう。著書の邦訳に寄せた何義麟の解説にも、コルクユフは台湾独立を掲げる知識人や政治家の評価を得ているが、一方で多くの外省人の理解を得られていないことも指摘できるとしている⁵。

以上のように、「新台湾人」の概念には「台湾本土化」という政治的立場

から、省籍に起因した対立を越えた新たなアイデンティティの確立を示すものとみなされる傾向が指摘できる。そして、このような意味を内包した「新台湾人」の概念を、民主化の前進として積極的に評価する傾向が、日本の知識人やマスコミの論調にあるだろう⁶。とりわけ、2008年3月の台湾総統選挙における馬英九勝利について「国民党の李登輝の戦略に回帰」したことと、馬が「台湾人意識を主張」したことを取り上げ、人々の「台湾人アイデンティティの強まり」をことさらに強調する内容が多く見られた⁷。

これらの議論のなかで若林は民主化に続いた台湾ナショナリズムの成長について「台湾アイデンティティの強まり」とは「台湾自決主義の定着の裏付け」であると積極的に評価している。また若林は、台湾における民主化と台湾化について「台湾化は必ずしも民主化を含意してはいない」としながらも、今日までに台湾化が民主化に直結しなかった事例は限定的であり、台湾の台湾化とは、民主化に必要な要素であったと述べている⁸。さらに、本省人、外省人の対立が政治に持ち込まれる旧来の構図から、政策で競う新時代、つまり「統一」でも「独立」でもなく、現状を維持しつつ中国との対話を進める選択にこそ、台湾の民主化の成熟を見てとれるとも指摘している⁹。筆者も若林のこれらの主張およびマスメディアの論調を基本的に支持している。

だが、一般のマスメディアを含めて今回の台湾総統選挙をめぐる報道のなかで、筆者が一面的な議論ではないかと疑問を持っているのが、「台湾アイデンティティ」や「台湾化」を主張した論調とセットで、「世論は統一を支持したわけではない」と強調することで、台湾独立論に一定の配慮を示していることである。すなわち「台湾アイデンティティ」や「台湾化」を論じる際に、その政治的な高まりを強調し、李登輝の提唱する「新台湾人」を再評価して、独立派の思想的な基盤である「台湾本土化」論に立脚しながら、台湾の民主化を評価しているように筆者には思えるのである¹⁰。

つまり、依然として日本の知識人や新聞は、「台湾本土化」に基づく台湾独立論と、それに対抗する中国との「統一」論との政治的な二項対立を議論の前提に、しかも往々に「台湾本土化」＝台湾独立を支持しながら議論を進めていると言えないだろうか。

これに対し、2008年3月31日の台湾『中国時報』は、同紙が行ったアン

ケート調査に基づき、回答者の 45 パーセントが台湾のエスニシティーの対立は深刻になっていると回答し、深刻ではないと回答した 36 パーセントを上回っていると論じた。また回答者の 54 パーセントが政客こそ台湾のエスニシティーの対立が深刻になる要因であるとしたという。

この調査結果に関連して黄長玲は「文化平等」の概念を提示し、「民進党は執政を取る以前、『台湾人の尊厳』を提唱してかつての国民党権力の分配の不合理性に挑戦したが、民進党が政権を掌握後、国民党支持者は、民進党は既に政治権力を掌握したにもかかわらず、まだなお『台湾人の尊厳』を主張し、エスニシティーの議題を操ることで、明らかに政治利益を獲得していると考えていた。しかし一方の民進党支持者は自分たちが政権を握っても依然として『台湾人の尊厳』は確立されてないと考えており、結局のところ政治権力は文化的な平等を創造する効果は全く無かった」と述べている。

王甫昌もまた「大多数の台湾人は、本省人、外省人などの省籍に関係なく、大概はすでに台湾を一つの政治実体とみなすという共通した認識を有している」としながらも、90年代からの政治衝突や競争はそれぞれのエスニシティーが自分こそが弱者であると主張しながら、新たにエスニシティーに基づく差異や不公平を生み出すことで、差別や偏見は却って増加したと述べている。

李広均は「たとえ政治的『独立派』、『統一派』を信任できなくても、社会における人間関係の信任には何の問題もない」としながら、毎回の選挙熱は各エスニシティーの言語を排斥するというマイナス面を指摘でき、エスニシティーに関する苦痛の程度が最も高くなると指摘する。また、『四大エスニシティー』の分類は、『エスニシティーの政治化』を導き、ただ『統一』、や『独立』の議論や『政党』のみに注意を向けていると、極めて重要な文化融合の現象を見落としてしまう」と述べている¹¹。

三者のコメントは、選挙に関連し「台湾人意識」を政治的に強調し、エスニシティーを意識させるような議論は、それに起因した対立を新たに産み出すことを示唆し、また文化面などで融合している社会の現実を見落とすことを批判している。三者のコメントに学びながら、筆者なりに「新台湾人」をめぐる問題を敷衍すると「新台湾人」や「台湾アイデンティティの確立」などの議論が「統一」か「本土化」か、という政治的二項対立の議論に収斂さ

れると、各エスニシティーの議論が平行線をたどり、各エスニシティーの隔たりをさらに深めるという問題点が存在しているといえよう。

本来、外省人同様に本省人も多様であり、さらに台湾全体を見渡したとき、先住民族の問題など単純な二項対立の図式では見落としてしまう問題が少なくないことはいうまでもなからう。省籍矛盾に起因した政治的な二項対立に立脚しながらの議論では、台湾の多様な人々の意識を包括することは出来ず、いずれの議論においても必然的に置き去りにされる人々を生み出すことになるのではないだろうか。

2. 「新台湾人」の再検討

『中国時報』については、国民党系のメディアだと指摘もあり、先に紹介した黄らの議論の政治性を無視してはならないだろう。しかし筆者はそうした点を踏まえてもなお、三者の指摘は今日の「新台湾人」を再検討するうえで軽視できない論点を提起していると考えている。それは筆者が今回の選挙において支持された世論の「現状維持」との意向に注目しているからである。2008年3月の台湾総統選挙において、与党で民進党候補の謝長廷は、民進党政治家のスキャンダル報道が選挙前に先行していたという不利な状況もあったが、その公約である「台湾独立」の主張が人々の理解をえられず、敗北した。逆に「現状維持」を主張した国民党候補の馬英九が支持され、総統に選出されている。また同時に、台湾名義による国連新規加盟、あるいは中華民国、またはその他の名称による国連復帰を目指すことについての公民投票も行われたが、投票率が50%に満たず否決された¹²。

この「現状維持」は政治状況が変化すれば独立か統一かの議論に収斂するのであり、台湾の人びとの政治意識の潜在的な趨勢を見極めるべきだと意見もあろう。だが筆者が注目したいのは、「台湾の今の状況が続いて欲しい」と願う人々が最も多いという現実である。なぜなら当面、現在の台湾をとりまく国際環境が独立派にとって有利な形で劇的に変化する見込みはなく、中華人民共和国の「一つの中国」との原則も不変であると思われる。とすれば、多くの人々にとって「台湾独立」により得られる国際的地位や政治的発言力の向上は、現在の台湾の「現状維持」に勝るものではないように思われる。

したがって現在の台湾における「現状維持」の根底には、中国との経済的な関係も含めた、生活に根差した現実の生活重視から始まる安定志向があり、これこそが現実を見据えた人々の世論であろう。

この「現状維持」派の増加こそが、本省人＝改革派＝民進党支持者、外省人＝保守派＝国民党支持者という省籍問題に起因した対立を煽ってきた言説からだけでは、台湾の現実を理解することは難しくなっていることを示していると言える。つまり本省籍・外省籍を問わず二・三代が世論の中心を担う現在、「統一」や「台湾本土化」を支持するか否かなどいった政治的な議論にかかわることをさしあたり拒否し、生活の安定・向上を第一義的に重視する議論も始まっているといえるのではなかろうか（拙稿ではさしあたりこうしたアイデンティティのあり様を「もう一つの台湾人」意識と呼ぶ）。

ではこの「もう一つの台湾人」意識の根源はどこまでさかのぼることができ、またどのような方法を通じて検討することが可能であろうか。この点にかかわって筆者が着目しているのは、コルキユフを批判した何義麟の議論である。何は台湾の外省人文学の多様性を例に挙げて、コルキユフの議論は外省人のアイデンティティの多元性を見落とす可能性があるとして述べている¹³。筆者は何の議論に全面的に賛成するものではないが、外省人文学をとりあげることが台湾人アイデンティティを考察するうえでも重要だと思われる。以下、外省人文学研究の状況を概観しながら、台湾におけるアイデンティティ問題の研究課題と方法について初歩的に検討しておきたい。

1970年代に入ると、1960年代における外省人二世作家・白先勇などを中心とした雑誌『現代文学』のモダニズム文学¹⁴に対し、その現実から乖離した風潮に疑問を抱き、台湾の厳しい現実を見つめ作品化する作家たち、郷土文学派が現れるようになる。彼らは日本統治時代の台湾人作家の作品を再検討し、自分たちルーツが台湾であるという自己の存在理由を再確認し、台湾への帰属意識を深めた¹⁵。

1970年代初期の郷土文学派の作家の共通する特徴は、台湾の現実と向き合おうとしたことであつた。だが、どの現実にもどのように向き合うかで、各作家や批評家の認識にずれがあり、郷土文学とモダニズム文学は共通点も少なくなつた。実際、白先勇自身「台湾の60年代作家の作品の中では『現代』

と『郷土』は往々に並存していて、70年代の郷土文学論戦におけるようにはっきりと対立するものではなかった¹⁶と述べている。また、台湾で成長した白先勇らも現実に向き合わざるを得ず、そのことは必然的に自らを台湾に生きる中国人と認識することを意味したのであり、生まれ暮らす土地としての台湾への帰属意識が1970年代は本省人、外省人を問わず若い世代に共有化されつつあった¹⁷。郷土文学とモダニズム文学は対比的に論じられる傾向があるが、この時代における「自己回復」の過程において、両者は相互に影響しあう部分も多かったと言える。

だが、多くの郷土文学派の作家が、文学を政治に結び付けていく立場を表明し、当時の民主化の高まりの趨勢のなかで、台湾本土化を支持する作家、政治家、学者などの多くの知識人の支持を獲得した。さらに1980年代に入ると本省人を中心とした民主化の高揚により、中国大陸との歴史的、文化的関係性は後退し、代わって本省人を中心とした「台湾意識」が社会の主流となり、閩南語の普及や伝統行事を復活するなど台湾の歴史の掘り起こしが急速に進められた。

だが「台湾意識」の担い手は、本省人のなで多数派の占めた閩南語を話す福佬人系の人々であったため、外省人をはじめ少数派エスニシティーを排斥する傾向も内部に存在していた。それゆえ民主化の機運が高まった1970年代から80年代という時期は、エスニシティーの意識化に拍車がかかり省籍矛盾に起因した対立も激化したと一般的には考えられている。

このような時代において、あえて「民主化」と距離を取り、政治と文学を切り離した純粋な文学活動に専念し、郷土文学派を批判していた外省人作家がおり、その拠点として批判されたのが、雑誌『三三集刊』であった。この雑誌は1977年から1982年まで公刊された文学の専門誌で、この雑誌の指導者とみなされた国民党系外省人作家・朱西寧は『三三集刊』で郷土文学を偏狭的な地方文学であると批判したのである。

彼ら『三三集刊』の雑誌の基本姿勢は、国民政府・国民党の提唱する『中国正統文化の継承』と矛盾せず、その政策には容認姿勢であった。それゆえ、朱西寧・胡蘭成といった国民党系の外省人一世作家と、その影響を受け、彼らの意志を忠実に継承する若手の外省人二世作家たちを中心としたこのグル

ープは、中国民族主義の正統な担い手意識を体現したとされている¹⁸。

また、この時期の排斥的な「台湾意識」に対し、少数派である外省人二世作家の中には、自分たちの過ごした軍人村（眷村）や幼少期の日常生活などを描き、急速に進められる「台湾化」に対し、忘れられた少数派の「記憶」をめぐる内省的物語を描くことで政治的異議を唱えたとされる。彼らの作品群は軍人村文学（眷村文学）として一般的に認知され、今日においても外省人代二世世代という出自と不可分に関わっていると評価されている¹⁹。彼らのような外省人作家は、当時は国民党擁護派、体制側の外省人という一面的な枠組みで捉えられ、民主化の潮流に反した、「台湾本土化」とは対極に位置するというレッテルを貼られがちであった。弱体化しつつある当時の国民党政府を擁護するとみなされたのである。

これらの1970年代以降の外省人作家をめぐる一連の議論から、彼らに対する評価を検討すると、世代や民主化の成否にかかわらず、彼らは一貫して省籍に起因した対立に基づき、政治的に評価がなされる傾向があると言えるだろう。だが1960年代における自先勇のモダニズム文学における「自己回復」には、現在の「もう一つの台湾人」意識に通じるような議論も見受けられた。また『三三集刊』の参加者には外省人作家がやや多いが、後に台湾映画界で活躍する呉念真など、本省人作家も多く参加していた。先に触れた朱西寧や外省人二世作家である三毛などは、雑誌『現代文学』に参加した経歴を持つなど、その顔ぶれは多彩だった。『三三集刊』は誰でも投稿でき『聯合報』、『中国時報』などの文学賞への登竜門的な雑誌として一定の評価をえており、『三三集刊』に集った作家は200人を超えた時期もあったと言われている²⁰。国民党系文学といった端的なレッテルでは、多様な様相を呈していた彼らの活動の本質を理解できないだろう。

今後は省籍の対立が最も激化したといわれる1970～80年代にかけて、台湾全体を包括した意識の深化・発展がみられるかどうか、こうした点をさらに検討してゆくが必要があると感じている。

3. おわりに

拙稿では「新台湾人」の言説と問題点を再検討することで、これまでの歴

史学研究においては、国民国家という大きな政治的枠組みのなかで台湾を捉えることに重点が置かれていたことを指摘した。もちろん、こうした視角からの研究がもたらした成果は大きなものであり、現在でも台湾研究に貴重な業績を生み出しつつある。

だが筆者は、国民国家論の視点からのみ台湾史を理解することには、台湾の特殊性を単純化するというネガティブな可能性が孕まれているのではないかと危惧するものである。そこで、文学研究の成果と課題を検討することを通じて、その限界を克服するための新たな課題を不十分ながら提示しようとした。この点について今少し補足すれば、たとえば『三三集刊』の有カメンバーだった朱天文・朱天心・朱天衣の姉妹が執筆した『下午茶話題』（1992、麦田出版）で、朱天文は次のように述べている。

もしかすると、[あなたがたは] 私たちが革命を通じて、婦女の仕事の向上を図ることを期待しているとおっしゃるかもしれませんが、でもごめんさい、私たちはそのような気持ちはありません。…湾岸戦争が最も緊迫しているとき、夫の浮気相手の話しをし、台湾独立案の時に珈琲を飲みながらおしゃべりをし、そして国民大会の万年議員に対する憲法改正で台湾大学の学生が絶食抗議を続けているとき、ダイエットの話しをしています。もう貴方はわかりましたね、私たちはラディカル派でもなく、保守派でもなく、ただ生存派なのです。

周知のように彼女は、朱西寧の娘＝外省人二世作家で、眷村文学の代表のように言われる朱天心の姉である。だが、その彼女がそれまで国民党の支配下ではタブーだった「二・二八」事件を正面から取り上げ、外省人による本省人に対する凄惨な抑圧の事実を描き高い評価を得た映画「悲情城市」（1989年）のシナリオを書き上げた。「生存派」に至る彼女の文学者としての軌跡は、彼女のその後の歩みを含めて台湾アイデンティティの問題を考察するうえで、好個の対象となるのではなからうか。

註

- 1 たとえば、以下の研究を参照のこと。戴国輝『台湾と台湾人—アイデンティティを求めて—』研文出版、1991年。若林正文『台湾抗日運動史研究増補版』研文出版、2001年。何義麟『2・28事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス—』東京大学出版会、2003年。ステファン・コルキュフ（上水流久彦・西村一之訳）『台湾外省人の現在—変容する国家とそのアイデンティティ—』風響社、2008年。
- 2 李登輝『台湾の主張』PHP研究所、1999年、194—196頁。
- 3 李登輝・中嶋嶺雄『アジアの知略—日本は歴史と未来に自信を持って—』光文社、2000年、236頁。
- 4 コルキュフ前掲書を参照のこと。
- 5 同上、235—236頁。
- 6 李・中嶋前掲書で中嶋は「民族対立を超え『省籍矛盾』を克服しようとして到達した『新しい台湾人』というアイデンティティの確立は、21世紀に人類が採るべき道を照らし出す実験だ、と私は考えている」と述べている。また角間隆『李登輝—新台湾人の誕生』小学館、2000年、16—20頁、46—83頁などを参照のこと。
- 7 天児は「国民党にとっては台湾住民の立場や感情を理解し、基盤を置かなければならない。『新台湾人』はもともと李登輝総統が提唱したものが、それを国民党の立場で実践してきた結果という見方もできる」と述べている（天児慧・金子秀敏「緊急対談・台湾総統選挙」『毎日新聞』2008年3月24日）。そのほか、小笠原欣幸「単純な『親中』ではない」『毎日新聞』2008年3月23日、「台湾政治がまた進化した」（社説）『朝日新聞』2008年3月23日、「台湾の馬新総統は中国との対話再開を」（社説）『日本経済新聞』2008年3月23日などを参照のこと。
- 8 若林の言う「台湾化」とは、「1970年代以降、政治的には、本省人が十全の市民権を求めてこれを確保し政治的平等を達成し政治権力を獲得し、台湾に明白な国民国家の地位を求めることができるようになっていくプロセスを言い、文化的には台湾社会・文化・歴史の独自性は台湾人自身の観点から評価され解釈されるべきであるとの考え方」を指している。また若林は、未だ論争的であるとしながら、この意味での「台湾化」は台湾において「本土化」との認識が一般的であることも指摘している（若林正文『台湾の政治史—中華民国台湾化の戦後史—』東京大学出版会、2008年、417頁）。
- 9 若林は「台湾ナショナリズムの根っこにあるのは、大国の周辺に位置し

近代以来外来者の支配を受けた歴史をもう二度と繰り返したくない、自分の運命は自分で決めたいという台湾住民の願望だ」と述べている（若林正文「視点」『朝日新聞』2008年3月23日、石井利尚「馬英九の台湾（上）」『読売新聞』2008年3月23日などを参照のこと）。

- 10 若林前掲記事で「民主化に続いた台湾ナショナリズムの成長物語は一段落を告げたと言える。挫折したのは陳政権2期目の急進ナショナリズム政策であって、台湾ナショナリズムの根っこにある台湾自決主義ではなかった。台湾ナショナリズムの成長物語の末尾に打たれたのは今のところ休止符であって終止符ではない」と述べている。
- 11 「族群已融化 別讓政治撥弄」『中国時報』2008年3月31日、および「擺脫幽靈 新時代向前行」『中国時報』2008年3月31日を参照のこと。
- 12 公民投票法第30条では「公民投票の結果は、投票人数が全有権者総数の1/2以上となり、かつ有効投票の1/2を超える同意があれば通過する。投票人数が満たなかった場合や、有効投票の1/2を超える同意がなかった場合は否決される」と定められている。
- 13 コルキューフ前掲書、237-245頁。
- 14 白先勇の小説におけるノスタルジアについて山口は「官美な美学と、精神病みという両義性を有しながら、空間・時間・文化などの多層的レベルでの物語の主旋律を奏で、異郷という意識を持つ郷土への帰属意識と、失われた時間という意識を持つ過去への帰属意識の相互関係を見据えている。それは、1960年代台湾モダニストがアイデンティティー・クライシスに苦悩しながら、歴史や時代と向き合う時の、ひとつの真摯な態度でもあっただろう」と述べている（山口守「白先勇と60年代モダニズム」同編『講座 台湾文学』国書刊行会、2003年、207頁）。
- 15 葉石濤（中島利郎・澤井律之訳）『台湾文学史』研文出版、2000年などを参照のこと。
- 16 白先勇（池上貞子訳）「1960年代の郷土文学と郷土」『日本台湾学会報』第3号、2001年、135頁。
- 17 この点について山口は、白先勇たちの現実から遊離した姿勢とは、当時の社会コンテクストにおいては、単なる高等遊民の現実逃避ではなく、背後に中国ナショナリズムを核とする権力言説への反抗の意味を持っている。60年代モダニズムもある意味では、当時の台湾社会に向き合っていた点で、自らが生きる社会に対する現実感を含んでいたことを意味している」と述べている（山口前掲書、173頁）。
- 18 沈芳序『三三文学集団研究』静宜大学中国文学研究所、修士論文、2004

年、140頁。

¹⁹ 清水賢一郎「『記憶』の書」、朱天心『古都』国書刊行会、2000年、315頁。

²⁰ 沈前掲論文のほかに、莊宜文「三三文学集団研究」『国文天地』13巻8・9期、1998年などを参照のこと。

(erinakawa@hiroshima-u.ac.jp)